2016. 6. 13

尼崎市立大庄北中学校　第３学年　社　会　科　通　信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

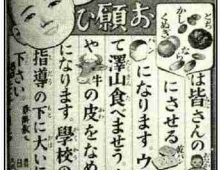
No.２４

食料の確保　と　子どもたち

ドングリやイナゴの食用化

食料が不足してくると、人々は、様々な方法を考え出した。**不足する食料を確保する方法は３つ**ある。**食糧自足、買出し、これまで食べなかったものの食用化である**。米に代わる食料として、南瓜やさつまいもの栽培がさかんに推奨されると同時に、ドングリやイナゴの食用化がすすめられた（小学校の運動場で南瓜が栽培された・前号の「なんでやねん」参照）。右のような代用食品採取のポスターも作られた。

このポスターには「とち、かし、なら、くぬぎは皆さんのおなかを一杯にさせる乾パンやあめやパンになります。ウント拾って沢山食べましょう。また、アルコールや牛の皮をなめすタンニンになります。学校の先生の指導の下に、大いに拾って下さい。農林省・日本林業会」という文言がみえる。**子どもたちの力**も**徹底的に借りようという作戦であった**[1]。



代用食品採取のポスター

昭和19年立花国民学校高等科２年生の壕堀作業　（河合勇雄氏提供）
（『尼崎市史　第３巻』p. 665）

集団疎開先でも、子どもたちは自分たちで食料を作った（探した）

食料が不足する中でも、「産めよ増やせよ」と、妊娠・出産を期待された女性や将来の日本を託す乳幼児・学童については、配給量などで特別な配慮が払われた。

昭和16年（1941）４月には**尋常小学校**が**国民学校**と**改称**され、**皇国民養成教育**が**強化された**。大本営は連戦連勝を宣伝していたが、昭和19（1944）年6月にサイパン

1）江原絢子・石川尚子・東四柳祥子『日本食物史』吉川弘文館 2009年 p. 297。代用食品採取のポスター『子どもたちの昭和史』大月書店 1984年。

島が陥落すると、その後、大都市各地には容赦ない**空襲**が襲いかかるようになった。

本土空襲の危険が迫ってくると、政府は児童の**集団疎開**を決定した(昭和19年(1944)6月)。児童(小学生)を疎開させる都市は、東京都、川崎市、横浜市、横須賀市、名古屋市、大阪市、神戸市、**尼崎市**、沖縄県であった。

川辺郡中谷村へ集団疎開した長洲国民学校４年生　(長谷川滋勇氏提供)
(『尼崎市史　第３巻』p. 726)

尼崎市の疎開先は、兵庫県内の川辺・多紀・氷上・多可の郡内とされた。昭和20年(1945年)には、初等科全児童が対象となり、疎開先175カ所、5,115人であった(男女別に疎開)。疎開先では週１回は授業を受けることになっていた。その他の時間は、畑の開墾や手入れ、薪炭の運搬などをおこなったが、生活環境の変化や食料の不足で病人も発生し、引率の教員らの苦心は大きかった[2]。

尼崎市の記録が手元にないので、東京都の例で、疎開先での児童の暮らしを、次に紹介しよう。

疎開先での食料の入手について、米や麦、いもなどの主要食糧は、東京都が疎開児童を受け入れた県に割り当てるが、野菜や魚などの副食[3]は地元で調達するようになっていた。また、疎開児童に食糧・燃料の自給・生産を行なわせることになっていて、疎開児童を引き受けた地元が協力してくれることを前提にしているだけでなく、子どもたちの労働をもあてにしていた[4]。この点は、尼崎市でも同じであった。

集団疎開先での食事の献立の違いを調査した研究がある。その調査によると、地域や学寮によってほとんど差がなかった。朝食は麦や豆かす・コウリャンなどを入れたカテ飯[5]・みそ汁・漬物、昼食には一品程度のおかずがつき、夕食は雑炊・すいとんというのが、集団疎開の基本的な献立であった。地域や、季節により、いくらか内容は変化するが、毎日・毎食同じ食材が使用される点はどこも同様であった[6]。各種の野菜、イナゴ、蜂の子、さなぎ、カエル、へび、すずめ、ドングリ粉、柿の皮の粉、干馬鈴薯なども副食にしたと報告がある[7]。

---

2) 『尼崎市史　第３巻』尼崎市役所 1970年 pp. 726-729。

3) ふくしょく。主食に添えて食べるもの。おかず。菜(さい)。副食物。反対語は主食。

4) 前掲、江原絢子・石川尚子・東四柳祥子『日本食物史』pp. 288-289。

5) かてめし【糅飯】量の不足を補うため、米に麦・豆・大根・海藻などをまぜて炊いたご飯。

6) 前掲、江原絢子・石川尚子・東四柳祥子『日本食物史』p. 289。

7) 前掲、江原絢子・石川尚子・東四柳祥子『日本食物史』p. 299。